

One／フィデリティ・ブルーチップ・グロース株式ファンド

中身・押しポイント・リスク・将来性。そして、IT株が下げる中で
基準価額が保たれている理由。

作成 2026年9月26日 | 基準価額は9/25公表分、米国株価は9/24終値、アナリスト予想は9/26取得

結論(5つの要点)

- 1** 中身は「AI」と「巨大企業」への集中投資。約240銘柄を持つが、AI用の半導体・メモリー・通信・電力設備(AIインフラ)が36%、グーグル(アルファベット)・アマゾン・マイクロソフト・メタとアップルで32%。上位10銘柄で55%を占める。
- 2** 押しは「AIの両取り」と利益の成長力。AIを作る側と使う側の両方を持ち、組入れ企業の利益は年29%伸びる予想で、株価はその利益の24倍。成長の割に割高ではない。運用者はAIで稼ぐ企業へ機動的に配分を移している(4ページ)。
- 3** 9月の値持ちは「守りの強さ」ではない。下がったIT株は主にソフトウェア株で、このファンドはほとんど持っていない。上がった半導体・メタ・アップルを多く持ち、円安への戻りと、連休明けの「2日遅れ」の反映(9/25 +4.03%)が重なった。
- 4** リスクはAIに集中している。値動きの63%はAIインフラ株から生まれる。AI投資が減速すれば基準価額は2~3割下がらう。ドル円(約159円)は過去30年でほぼ最も円安で、円高も重なりやすい。
- 5** 将来性は「成長が続くか」と「株価の評価」の掛け算。予想どおりなら高い成果もありうるが、株価の評価が下がれば年16%近い増益が必要になる。基本は控えめな見通しで考えたい。

付き合い方

AI投資の拡大に賭ける米国成長株ファンドとして、資産の「一部」を長く持つ候補。9月に強かったことを理由に「安全」と考えて買い増すのは避けたい。AI投資の減速と円高が同時に来ても耐えられる金額で。

★ ここが押し

36% + 32%

AIを作る側と使う側の両方を持つ

29%/年

予想増益率。株価は予想利益の24倍

72%

利益予想が上方修正された組入比率

ここに注意

63%

値動きのうちAIインフラが生む割合

1.727%/年

持っている間の費用(実質信託報酬)

米国の成長株に投資する、純資産約4,700億円のファンド

3段階の入れ子構造で、実際に株を売買するのはフィデリティのマザーファンド。中心の運用者は、米国で同じ戦略を2009年から運用するソヌ・カルラ氏です。

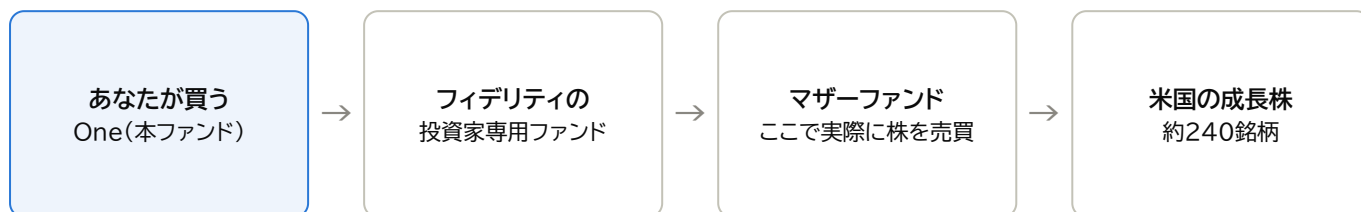


表1 3つのタイプ(中身の運用は同じ)

タイプ	基準価額(9/25)	純資産	分配金	NISA
成長型	20,224円	2,553億円	これまでゼロ	成長投資枠の対象
隔月決算型	13,400円	694億円	2か月ごと(直近400円)	成長投資枠の対象
毎月決算型	13,405円	1,445億円	毎月(直近120円)	対象外

- ¥** 費用は年1.727%。持っている間ずっと、基準価額から差し引かれます。
- 2** 基準価額は「2日遅れ」。入れ子構造のため、米国の株価は2営業日後に反映されます(6ページ)。
- \$** 為替ヘッジなし。円高になると、株が動かなくても基準価額は下がります。
- %** これまでの成績:成長型は設定(2023年12月)から約2倍(+102%)。うち約8%分は円安の効果で、最大で-31.6%の下落も経験しました。

ポイント

「ブルーチップ(優良株)」という名前でも、中身は値動きの大きい成長株への集中投資です。

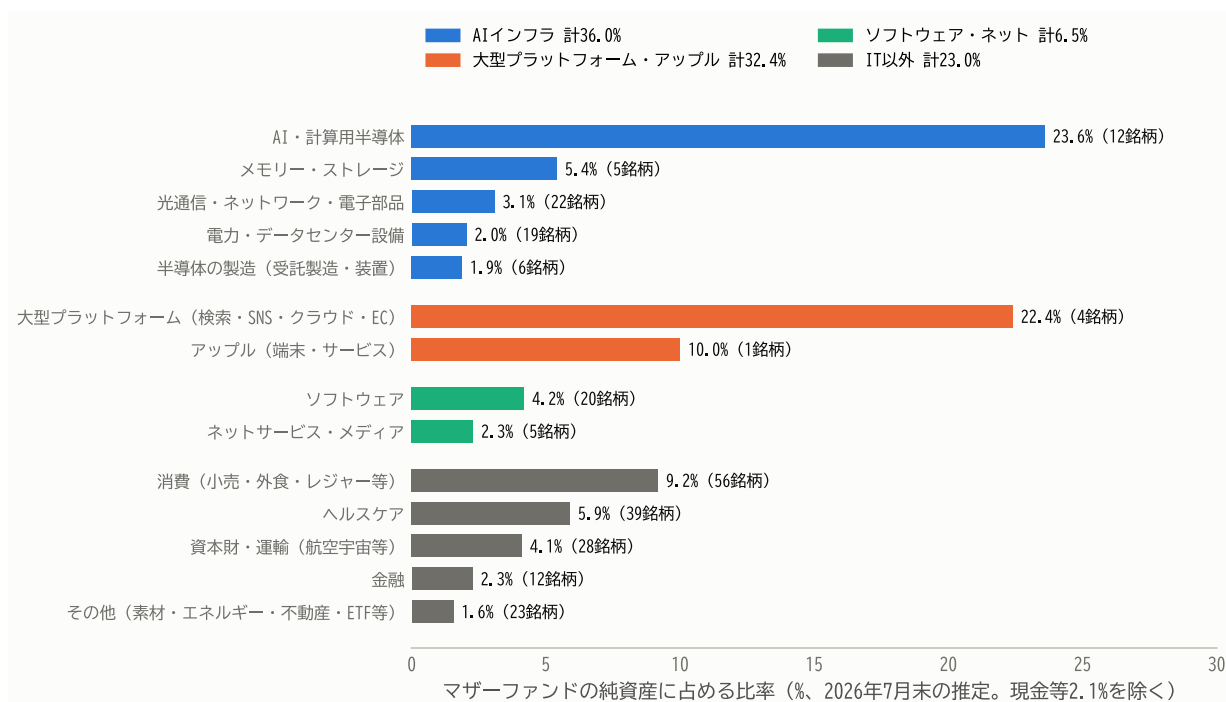
用語メモ

基準価額:投資信託1万口あたりの値段。このファンドは米国の2営業日前の株価を映す。**AIインフラ**:AI用の半導体・メモリー・通信・電力設備を作る企業。**予想PER**:株価が、今後1年の予想利益の何倍かを示す数字。**予想増益率**:アナリストが予想する利益の伸び。**分配金**:ファンドの資産から支払われるお金。払った分だけ基準価額は下がる。**1銘柄10%ルール**:日本の投資信託が1つの会社投資できる割合の目安(原則10%)。

資産の7割近くが「AIを作る側」と「AIを使う巨大企業」

AI用の半導体・メモリー・通信・電力設備(AIインフラ)が36%、巨大プラットフォームとアップルが32%。ソフトウェア株はわずか7%です。

図1 テーマ別の配分(2026年7月末の推定)



55%

上位10銘柄の合計
(アップル10%、NVIDIA9%、アルファベ
ット9%など)

58%

時価総額1兆ドル超の
巨大企業12社の合計

約22銘柄

比率から見た
実質的な銘柄数

ポイント

約240銘柄を持っていますが、成績を決めるのは上位の巨大企業とAI関連株です。銘柄数の多さは分散の証拠になりません。

★ ここが推し——数字で確かめられる6つの理由

AIを「作る側」と「使う側」の両方を持ち、利益の伸びに比べて株価は割高でない。利益予想も上向きで、経験の長い運用者が配分を機動的に動かしています。

★1 AIの「両取り」 36%+32%

推し AI用の半導体・メモリー・通信・電力設備(作る側、36%)と、それを買ってAIサービスを売る巨大企業とアップル(使う側、32%)の両方に投資。

注意 AI投資が減速すると、両方が同時に下がる。

★2 成長の割に割高でない PEG 0.84

推し 組入れ企業の利益は年29%伸びる予想。株価は予想利益の24.2倍で、成長率に比べて高すぎない。

注意 予想が下方修正されると、この前提は崩れる。

★3 利益予想が上向き 72%

推し 直近4週間で利益予想が上方修正された銘柄が組入比率の72%(下方修正は12%)。NVIDIAは上方修正25人、下方修正ゼロ。

注意 株価の上昇局面では、予想は楽観に傾きやすい。

★4 経験の長い運用者 2009年～

推し ソノ・カルラ氏は1998年にアナリストとして入社し、テクノロジー分野を長く担当。米国で同じ運用を2009年から続け、ブロードコムを0.3%→6.2%に増やし、上がりすぎたマーベルは減らした。

注意 判断が外れると、成績への影響も大きい。

★5 財務の強い巨大企業を中心に 58%

推し 時価総額1兆ドル超の12社で58%。倒産リスクは低い。9月に下げたソフトウェア株はほとんど持っていない(約4%)。

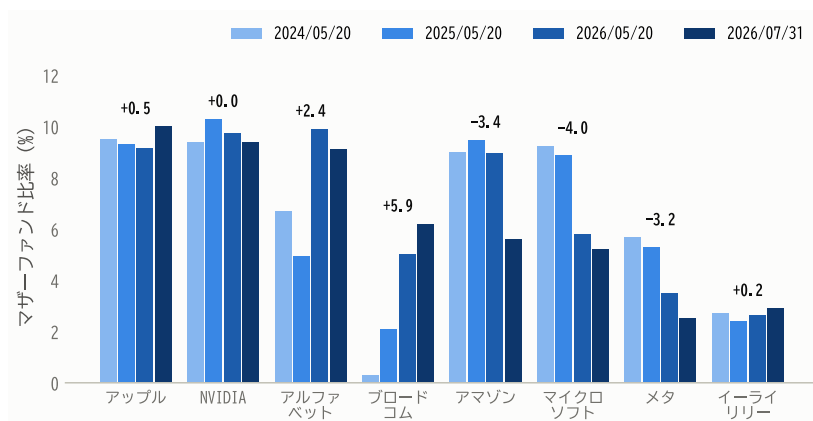
注意 少数の巨大企業で成績が決まる(上位10銘柄で55%)。

★6 実績と買いやすさ +26.6%

推し 成長型は直近1年+26.6%、設定来+102%(費用控除後)。円で少額から買え、成長型・隔月型はNISA成長投資枠の対象。

注意 設定来の約8%分は円安の効果。費用は年1.727%。

図2 運用者の動き——主要8銘柄の比率の推移(数字は2024/5→2026/7の変化、ポイント)



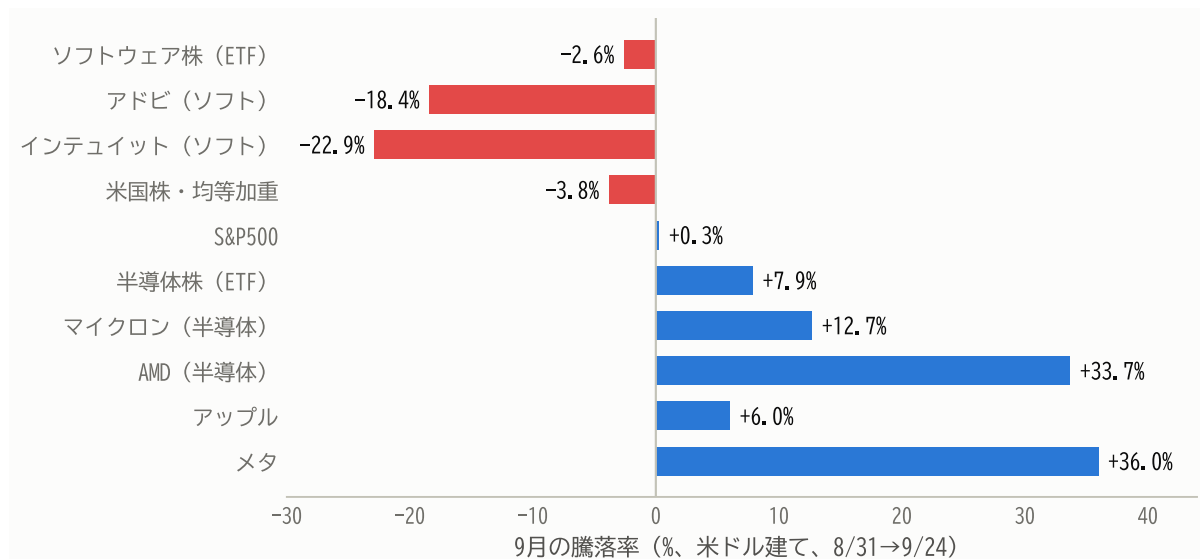
ポイント

米国の同じ運用のファンドは、過去10年で年率+22.1%(2026年6月末まで、米ドル建て、費用控除後)。ただし推しの多くは「AI投資の拡大が続く」ことが前提です。前提が崩れたときの振れの大きさ(7ページ)とセットで考えましょう。

下がった「IT株」は、ほとんど持っていなかった

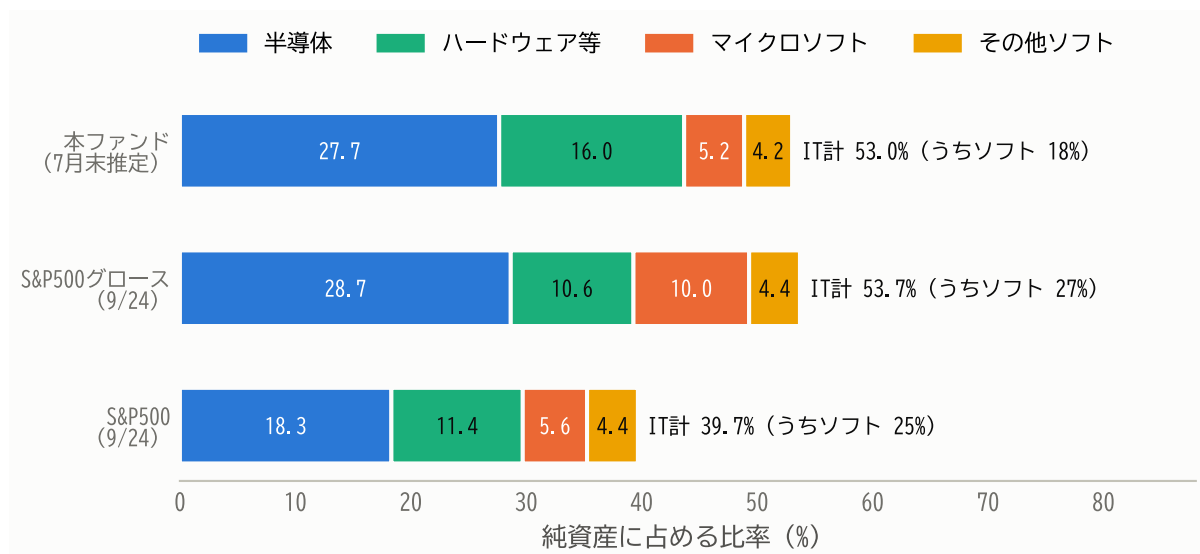
9月に大きく下がったのはソフトウェア株。このファンドのIT株の中身は、上がった半導体とハードウェアが中心でした。

図3 9月の値動き——下がったのはソフトウェア、上がったのは半導体とメタ



IT株全体は9月に下がっていません(IT株全体のETFは+4.5%、半導体は+7.9%)。下がったのはソフトウェア株と、一部の大手企業以外の「その他大勢」の株でした。このファンドはマイクロソフト以外のソフトウェア株を約4%しか持っておらず、ソフトウェア株が10%下がっても影響は約-0.9%です。

図4 IT株の中身(本ファンドはソフトウェアが少ない)

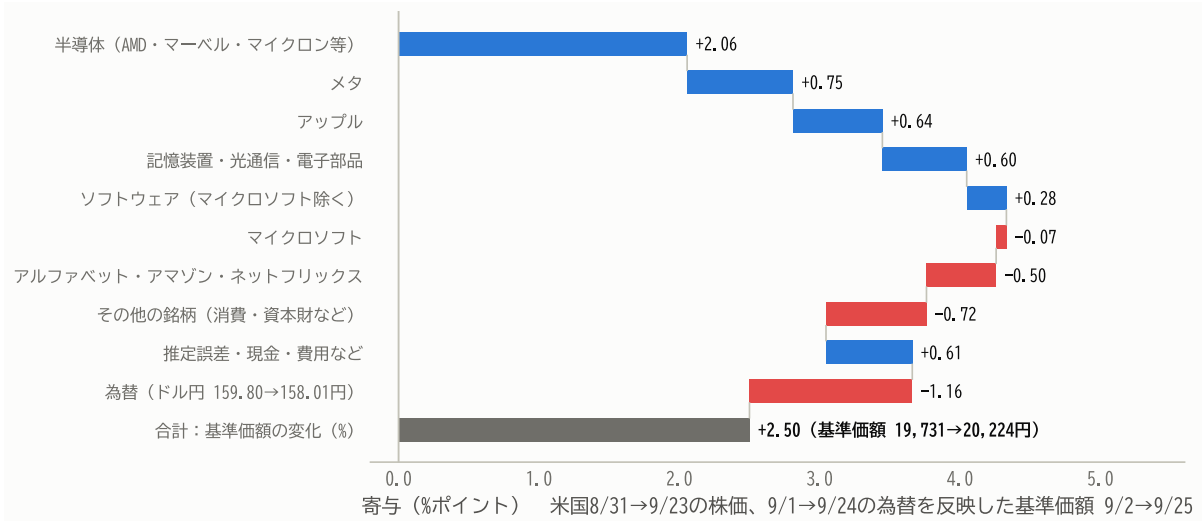


ポイント

「IT株安」のニュースの多くは、ソフトウェア株の話でした。このファンドにはあまり当てはまりません。

勝ち組を多く持ち、円安に戻り、連休明けにまとめて反映

図5 9月の基準価額の変化(+2.50%)を分解



組入れから推定した比率×各銘柄の値動き(推定)。推定の精度は、7月末から9月下旬の期間で実際との差0.08%。

半導体(+2.06)ではAMD・マーベル・マイクロンが、メタ(+0.75)は新しいAIエージェント「Muse」の人気の、アップル(+0.64)は折りたたみiPhoneの発表で上昇。円高(-1.16)やアマゾン・消費関連は押し下げました。

基準価額の日	映している米国の株価	為替	基準価額
9/17(木)	← 9/15の終値	+ 155.41円	18,935円(9月の最安値)
9/25(金)	← 9/18～9/23の4日分	+ 158.01円	20,224円(+4.03%)
9/28(月)	← 9/24の終値	+ 158.78円	約20,350円(推定)

基準価額は米国の「2営業日前」の株価を映します。日本の4連休(9/19～23)の間に米国で半導体とメタが急上昇し、その4日分と円安が9/25に一度に表れました。9月前半の下げ(-4.0%)の約3分の2は円高によるものでした。

値持ちの正体(まとめ)

① 下がったソフトウェア株をほとんど持っていない ② 上がった半導体・メタ・アップルを多く持っていた ③ 円高のあとで円安に戻った ④ 連休明けに米国4日分がまとめて反映された。

ただし最高値(6/4の20,754円)からはまだ-2.6%。半導体が崩れた6～7月には-8.9%下げています。

値動きの6割以上はAIインフラ株から生まれる

AIインフラは資産の36%ですが、値動き(リスク)の63%を生んでいます。アップルは比率10%でもリスクは3%です。

図6 資産の比率と、値動きに占める比率

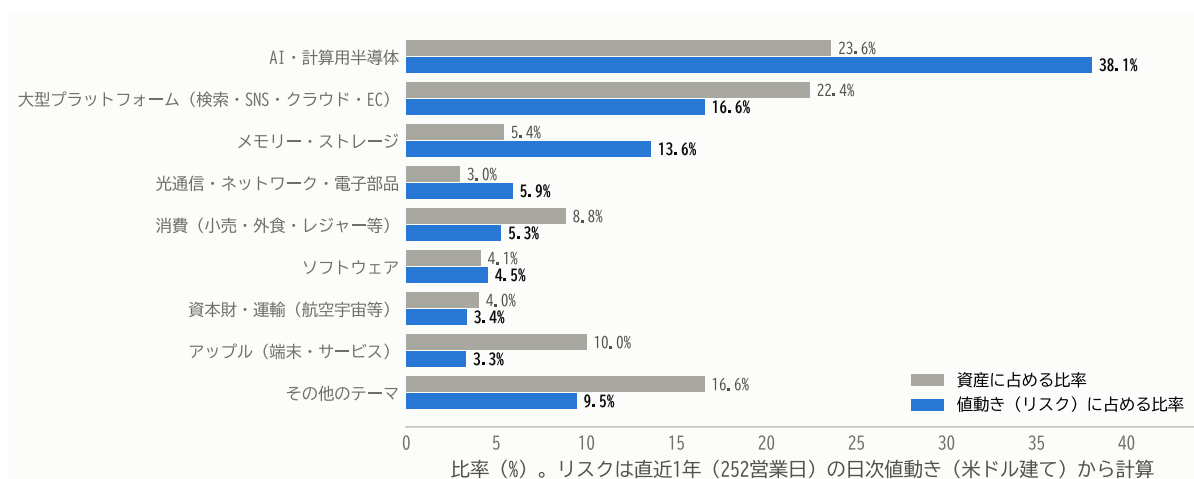
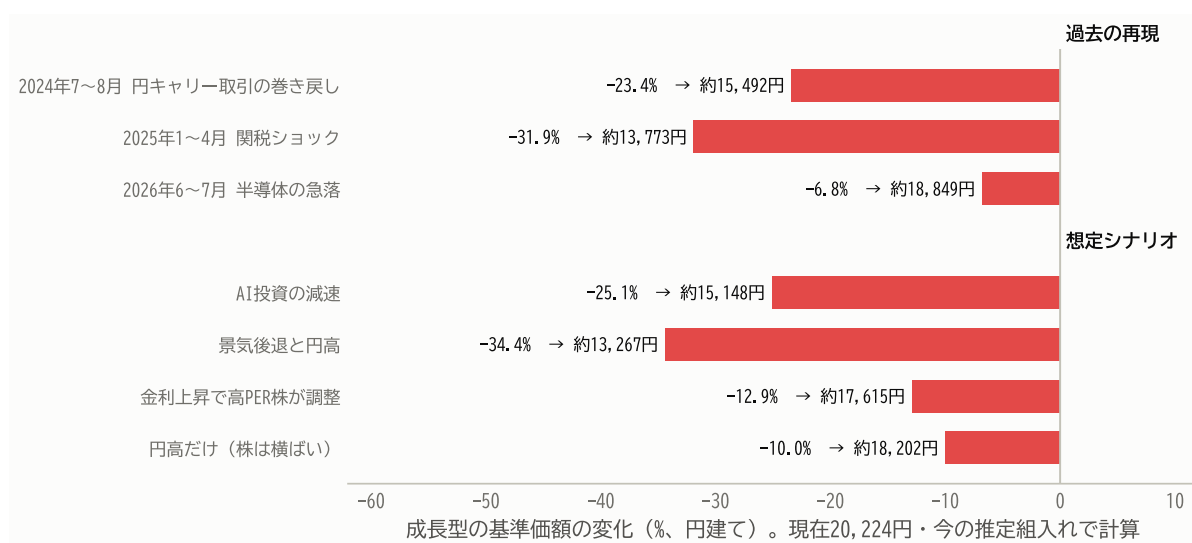


図7 今の組入れで、こんなことが起きたら(成長型の基準価額、いまは20,224円)



過去の再現は、今の推定組入れに当時の各銘柄の値動きと為替を当てはめた計算。想定シナリオは仕組みの確認のための試算で、予測ではありません。

ポイント

いまのドル円(約159円)は過去30年でほぼ最も円安の水準です。株安と円高が重なると、基準価額が3割以上下がることもありえます。持つ金額は、その下落に耐えられる範囲にしましょう。

成長はまだ続く。ただし成果は「株価の評価」次第

AI投資の需要は拡大が続き、利益予想も上向きです。ただ、投資の成果は「利益の伸び」と「株価の評価(PER)の変化」の掛け算で決まります。

- ▲ **追い風**: NVIDIAは次の四半期の売上を1,080億ドル(前期962億ドル)と見込み、メタは今年の設備投資を1,300~1,450億ドルと計画。利益予想の上方修正が組入比率の72%で続いています。
- ▼ **向かい風**: AI設備を買う側の企業は、投資が現金収入を上回るペースで膨らんでいます。メモリーの利益は2028年度に頭打ちの予想。米国の長期金利は約5.1%と高く、株価の評価が下がりやすい環境です。

図8 3年間の年率リターン(米ドル建て、費用控除後)——利益の伸び×3年後のPER

利益成長 年0%	年-14.0%	年-7.3%	年-1.2%	年+3.7%
利益成長 年10%	年-5.4%	年+2.0%	年+8.6%	年+14.1%
利益成長 年20%	年+3.2%	年+11.2%	年+18.5%	年+24.4%
利益成長 年29% (予想)	年+10.9%	年+19.5%	年+27.3%	年+33.6%
	3年後のPER 16.0倍	3年後のPER 20.0倍	3年後のPER 24.2倍 (今と同じ)	3年後のPER 28.0倍

予測ではなく、条件ごとの計算例。為替は含みません。

シナリオ	前提	円建ての目安(年率)
強気	予想どおり年29%の増益、PERは24倍のまま、ドル円158円	+27%
中間	増益は年10~20%、PERは20倍へ、ドル円145円へ	約-1~+8%
弱気	AI投資が減速し増益ゼロ、PERは16倍へ、ドル円130円へ	約-19%

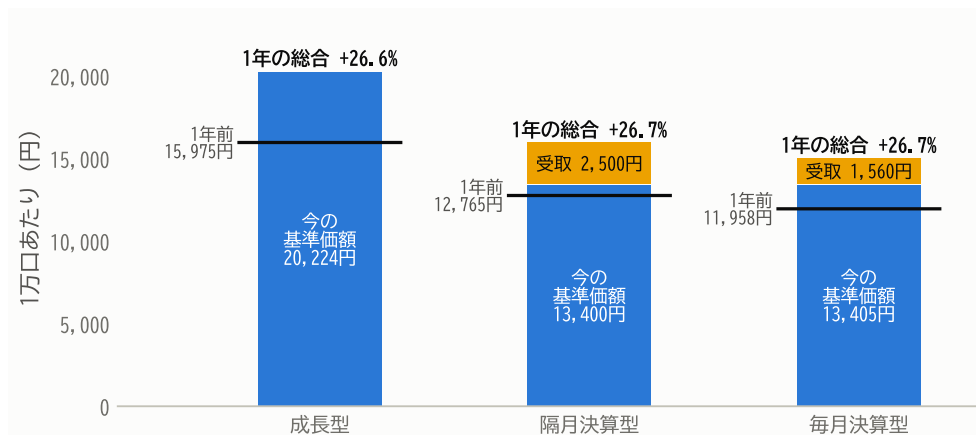
ポイント

年8%(米ドル建て)を得るには、PERが変わらなければ年9%台、20倍に下がれば年16%台の増益が必要です。基本は「中間」を想定し、「強気」はすべてがうまくいった場合と考えましょう。

分配金は「利益」ではなく「払い出し」

3つのタイプの成績は同じ(1年で約+26.7%)。違うのは、払い出すかどうかだけです。

図9 この1年の基準価額と、受け取った分配金(1万口あたり)



- 1 隔月型は1年で2,500円(いまの基準価額の約19%)、毎月型は1,560円(約12%)を払い出しました。
- 2 払い出した分だけ基準価額は伸びません。隔月型の基準価額は1年で+5%でした。
- 3 分配金の一部は「その期の利益以外」から出ています(直近の報告期間で隔月型25%、毎月型32%以上)。
- 4 毎月型はNISAの対象外。課税口座では普通分配金に20.315%の税金がかかります。

表2 費用の差は、長く持つほど大きくなる(100万円を投資した計算例)

持つ期間	費用 年1.727%(本ファンド)	費用 年0.1%程度の投信	差
5年	122.7万円	133.2万円	10.5万円
10年	150.5万円	177.4万円	27.0万円
20年	226.4万円	314.8万円	88.4万円

費用を引く前の運用成果が、どちらも年6%だった場合の計算例。低コスト側の費用は年0.09372%(例:たわろノーロードS&P500)。

ポイント

資産を増やしたいなら**成長型**が合っています。定期的に受け取りたい場合は、分配型の払い出しの大きさと、成長型を必要な分だけ売る方法を比べましょう。

このファンドとの付き合い方

★ この投資信託の推しポイント

[詳しくは4ページ](#)

- | | |
|--------------|---|
| ① AIの両取り | 「作る側」のAIインフラ 36% と、「使う側」の巨大企業とアップル 32% |
| ② 成長の割に割高でない | 予想増益率 年29% に対し、予想PER 24.2倍 (PEG 0.84) |
| ③ 利益予想が上向き | 直近4週間で上方修正された銘柄が組入比率の 72% |
| ④ 運用者の経験と機動力 | 2009年 から運用。ブロードコム 0.3%→6.2% 、上がったマーベルは削減 |
| ⑤ ファンド自身の実績 | 成長型は直近1年 +26.6% 、設定来 +102% (費用控除後) |

どれも「AI投資の拡大が続く」ことが前提です。裏返しの注意点は4ページ、リスクは7ページ。

向いている人

- ・ AI投資の拡大に、米国の成長企業を通じて5年以上投資したい
- ・ 3割を超える下落と、円高による上乗せの下落を受け入れられる
- ・ 年1.727%の費用を、運用者の銘柄選びへの対価と考えられる
- ・ 成長型をNISAの成長投資枠で持てる

向いていない人

- ・ 数年以内に使うお金、減らせないお金
- ・ すでに米国の大型ハイテク株や半導体株を多く持っている(同じリスクが重なる)
- ・ 分配金を利回りと考えて生活費をまかなう
- ・ 「9月に強かったから安全」と考えている

これから見ておきたい4つの数字

見るもの	いま	注意したい動き
メモリー・半導体の決算	9月は上昇	マイクロンの決算(9/30)や10月下旬の決算で見通しが予想を下回る
利益予想の向き	上方修正が72%	下方修正が上方修正を上回る
ドル円	約159円	150円を割り込むような円高(日銀の利上げ、為替介入)
米国の長期金利	約5.1%	さらに上昇(株価の評価が下がりやすくなる)

ひとことで言うと

AI投資の拡大に最も直接賭ける、腕の良い運用者の米国成長株ファンド。成長力は本物だが振れも大きい。資産の「一部」として、円高とAI投資の減速に耐えられる金額で長く持つもの。9月の値持ちは、相場の形がたまたま合った結果です。

詳しい根拠・計算方法・出典は「現状分析と将来性(詳細版)」にまとめています。